平成28年3月10日　日刊産業新聞

廃バッテリー価格 70円割れに続落

荷余り続き、指標高無視

鉛リサイクル原料の廃バッテリー（使用済み自動車用鉛蓄電池）の下落が止まらない。国内外向けに出荷している集荷業者の売り腰が軟化し、市中相場はキロ70円を下回ってきた。海外指標のロンドン金属取引所（LME）相場は9カ月ぶり高値を付けているものの、従来通り需給要因で値下がりしている。一方、国内の鉛リサイクルの空洞化懸念はひとまず後退した。

国内空洞化懸念は後退

廃バッテリーは鉛を重量比5割以上を含む代表的なリサイクル原料。国内集荷業者への持ち込み価格は2010年までキロ40－50円前後だったが、11年ごろから韓国二次精錬メーカーの高値買いが本格化。新規参入する輸出業者が相次ぎ、国内一次製錬・二次精錬メーカーも高値買いで応酬するなど、集荷競争が過熱していた。

14年末から15年春にかけ、市中相場はついに100円の大台に到達。当時のLME相場はトン2000ドル台から1700ドル台への下降局面だったにもかかわらず、韓国向けの輸出平均単価とともに市中相場は高止まりした。対韓輸出量はピーク時には国内発生量の4割相当の月1万トン近くまで増え、それに伴う需給のひっ迫が、指標を度外視した値上がりの背景があった。

ところが昨秋に輸出が3000トン前後まで落ち込み、需給バランスが緩和。「一度余ったことでリセットされて潮目が変わった」（集荷業者）という通り、集荷業者で荷余り気味となったことで、市場は買い手優位に傾いた。

年明けの市中相場は80円を割り、2月には3年ぶりに70円台前半、今月には70円を下回り始めた。

直近の財務省12－1月統計で韓国向け輸出は6000トン台の水準に戻り、LME相場も昨年6月以来のトン1900ドル弱まで上伸して反発要因はそろったものの、これまで指標変動を無視してきた値動きにならって下値を探っている。「まだ高いレベル」（二次精錬メーカー）と、いまだ適正価格に至っていないとの声もあるが、原料調達難で苦しんでいた国内二次精錬業はひとまず一息ついた格好だ。

原料需給を左右する韓国のリサイクル情勢は、中東や米国からの原料調達が安定して一定の原料確保のめどが立ったため、日本に対する輸出圧力を緩めている。

ただし、日本国内の廃バッテリー価格がこのまま値下がりし続けると、韓国勢の買い圧力が復活する可能性もあり、予断を許さない状況は続く。